

『ネアンデルタールとサピエンス交替劇の真相：学習能力の進化に基づく実証的研究』

A02班 第2回 班会議・共同研究会（2010年12月11日（土）於：神戸大学）

報告書

【第2回 班会議】11:00-12:00

参加者：寺嶋秀明（神戸学院大学・人文学部）、小山 正（神戸学院大学・人文学部）、山上榮子（神戸学院大学・人文学部）、窪田幸子（神戸大学大学院・国際文化科学研究科）、大村敬一（大阪大学大学院・言語文化研究科）、亀井伸孝（大阪国際大学・人間科学部）、早木仁成（神戸学院大学・人文学部）、林 耕次（神戸学院大学・人文学部 ポストドクトラルフェロー）、杉山由季（大阪大学大学院・人間科学研究科 大学院生）、以上9名

議題：

0. 新メンバーの紹介（研究協力者・林 耕次）

1. 研究の進捗状況報告：これまでの経過と年度末までの予定、予算消化状況

2. 第3回 A02 班会議・共同研究会（2011年2月18日）について

会場：神戸学院大学ポーアイキャンパス

発表者：箕浦康子（お茶の水女子大学名誉教授）、Bonnie Hewlett（ワシントン州立大学・客員教授）、Adam Howell Boyette（ワシントン州立大学・大学院生）
ほか、海外協力者2名（Barry S. Hewlett, Yasmine Musharash）が参加予定。

3. 第2回全体会議（2011年2月19日、20日）について

会場：神戸学院大学ポーアイキャンパス

発表者：寺嶋秀明（神戸学院大学・人文学部）、高田 明（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）、Barry S. Hewlett（ワシントン州立大学・人類学部・教授）、Yasmine Musharash（シドニー大学・政治科学社会学部・講師）

準備の依頼（**レジュメ作成：1/25 締切**、ポスター作成、写真パネル作成等）。

4. 2010年度末の報告書について

体裁・コンセプト、**原稿締切日（2/12 締切）**の確認

5. 年度末スケジュール

臨時班会議の開催（3月末 or 4月早々？）；2011年度の計画について

※赤澤先生より機関誌『交替劇』（仮称）創刊のお知らせ（**原稿締切日：2/19**）

【第2回 共同研究会】 13:30-17:30

「ヒトにおける遊びと学習の進化的展望プロジェクト」 13時～17時

参加者：班会議参加者 9名ほか、正高信男（京都大学 霊長類学研究所）、西秋良宏（東京大学総合研究博物館・A01班）、久米正吾（国士舘大学イラク古代文化研究所・A01班）＋オブザーバー2名（大阪大学・大学院生）

研究会プログラム：

1. 研究会の趣旨説明（寺嶋 秀明・神戸学院大学）

2. （研究発表①）「学習」と「創造性」をめぐる人類学的研究の諸問題

状況認知論と「身体化された心」理論と生態心理学から「文化化」問題を再考する
大村 敬一（大阪大学大学院 言語文化研究科・A02班研究分担者）

発表の概要：大村氏の問題関心である「イヌイトの知識（IQ: *Inuit Qaujimagatuqangit*）」を発端として、イヌイトの「知識」が「生き方」に反映されるプロセス、あるいはメカニズムについて、「文化の学習」（＝「文化化」）や学習による「創造性」をキーワードとしながら、おもに文化人類学の立場より、これまで扱われてきた理論に言及しながら考察した。実践の場においては、「記憶」と「身体化された知識」の表象として、「遊び」または「戯れ」に至るというテーゼ（仮説）を提示した。

3. （研究発表②）発達障害の **strength** と、その適応的意義：実証の可能性を交替劇に問う

正高 信男（京都大学 霊長類研究所）

発表の概要：現代社会においては、発達障害をもつということは負の側面から捉えられる傾向にあるが、他方で様々な分野での感受性、関心の高さがつよい者であることをこれまでに正高氏が行った実験結果の映像を交えながら提示した。その上で、発達障害をもつ者が、狩猟民のような社会では、淘汰されない存在として独自の道を切り開きながら、独自のライフスタイルと生計の道を切り開く **vitality** にあふれた者ではなかったのかという仮説を示した。

4. 総括

正高氏への質疑応答の際に引き続き、総合討論では、「狩猟採集民」「新人」「旧人」「サル」といった異なるレベルからの「創造性」、あるいは「模倣」についての発言が目立った。例えば、旧人による石器の加工を例に、「模倣」といっても、技術の産物である模倣と、心理学的に解釈

できる行動や行為の模倣であるという指摘がなされた。その上で、正高氏の発表で紹介された、発達障害にみられるような自然なものへの感受性・関心の高さが、(現代の) 狩猟採集民などにも共通するものではないかという推測が検討された。他方、「創造性」については、大村氏による発表でも指摘されたような、「悦び」や「遊び」を伴う行動が、現代の狩猟採集民のなかでもみられるある種の共通した事象としてみられる旨のコメントがあり、活発な議論が交わされた。現代の狩猟採集民にみられる「模様」や「創造性」の観察を通して、こうした関心が「学習の進化」という文脈で、今後どのように展開されていくのかに期待したい。

以上、文責・林 耕次（神戸学院大学・研究協力者）

【発表要旨①】

「学習」と「創造性」をめぐる人類学的研究の諸問題

状況認知論と「身体化された心」理論と生態心理学から「文化化」問題を再考する

大村 敬一（大阪大学大学院 言語文化研究科）

文化の学習とはどのようなことで、その学習における創造性とはどのようなことなのか。

文化人類学では、しばしば「文化化」とも呼ばれてきた文化の学習の過程が大きな問題になってきた。1980年代以前の文化人類学では、文化は個人によって後天的に学習されるべき知識であるとされ、そうした知識としての文化が個人に一方的に内化される過程としてばかり「文化化」の過程を考えてきたため、個人が文化を変化させてゆく創造的な過程が見過ごされてしまい、ある社会に属する諸個人は同じ文化を均質にプログラムされた自動人形のように描かれるようになってしまったからである。「文化化」の過程で人々にプログラムされる社会の本質であるかのように文化を描いてしまう本質主義の問題である。

こうした本質主義が批判されるなか、認知人類学者のジーン・レイヴはピエール・ブルデュエの実践の理論を導入しながら、自らのフィールドワークの成果に基づいて「文化化」の過程を再検討し、文化の学習はあらゆる日常実践に遍在しており、その日常実践＝学習の過程では、社会的な実践によって社会に参加してゆく個人は、文化を学習すると同時に創造的に変えていることを明らかにした。そして、そうした創造的な社会的実践＝学習の過程を分析するための理論的な枠組みを提示した。

この発表では、このレイヴの理論的な枠組みにティム・インゴールドの「身体化された心（心化された身体）」における学習理論を重ね合わせ、さらに、発表者がカナダ極北圏の狩猟採集民のイヌイトの間で行った調査の成果をジェームズ・ギブソンの生態心理学のアフォーダンスの考え方、モーリス・メルロ＝ポンティの身体図式の議論、大森荘蔵の記憶論、広松渉の表情論、フランツ・ボアズの「身体運動の習慣（モーター・ハビット）」論と様式変容論に結びつけた考察に基づいて検討し、次のような理論的な枠組みを仮説として提示した。

- (1) 日常的な社会・文化的実践＝学習の過程はすべて創造的である。
- (2) 実践＝学習過程の分析の枠組みは次の三つのレベルから構成される。
 - (A) 環境のレベル：記号体系（表象の体系）としての文化が、政治・経済的な社会制度と生態系にいかに関わり込まれ、生態＝社会＝文化環境の意味（価値）を生み出しているのか？
 - (B) 身体化された心のレベル：身体化された心に関わり込まれ、記憶が関わり込まれるのか？
 - (C) 弁証法的関係のレベル：身体化された心は、生態＝社会＝文化環境との関係の中でいかに動機づけられ、環境をいかに資源として利用しながら、いかに行為しつつ、学習を通して記憶をいかに更新し、いかに自らを変えたとともに、いかに環境を変えているのか？

- (3) 正当化された信念としての知識は環境レベルの問題であり、身体化された心が習得するのは記憶である。
- (4) 記憶の基本的な構成単位は、「～すると～することができた」という相互行為の型が身体図式の流れとして編成された身体の構えである。
- (5) 相互行為の型を示す身体図式の流れを最小のユニットとする記憶体は、多層のレベルからなる構造体として、神経ネットワークと身体形質として身体そのものに埋め込まれる。この意味で身体とは記憶体である。
- (6) 記憶のユニットである身体図式の流れには、知・情・意という三つの顔があり、認知と感情と意志は同時的に起動する。
- (7) 学習とは、記憶体としての身体と環境を共に変化させて調整し、身体と環境を直接にカップリングさせることで、「巨きな単一の振動装置系」として現存する環境に自らの身体を組み込んで身体を延長することである。この過程が共感と呼ばれる。
- (8) 表象とは、記憶のユニットである身体図式の流れを起動する装置であり、記憶のユニットとは論理階型を異にする存在である。
- (9) 表象は、環境の物理的な制約のないところで身体図式の流れを仮想的に組み合わせる戦略的なやり方を可能にする。これは身体図式の流れの組み合わせの自由度を上げ、実験的な手法を可能にする。
- (10) 社会・文化の変革は、身体図式の流れ、つまり技法を仮想的かつ意識的に組み合わせることによって生じる。
- (11) 身体図式の流れを仮想的に組み合わせる戦略的なやり方を可能にする表象は社会・文化の変革の可能性を増大させる。
- (12) 現生人類の学習の特徴は、表象の介在によって変革の可能性を増大させるところにあり、環境適応の幅を大きく増大させる可能性がある。
- (13) この表象によって現生人類は想起や妄想との戯れや遊びという贅沢を手に入れた。
- (14) 遊びは、表象という論理階型の多層性を利用する現生人類の能力の上に成り立つという意味で実験と同列だが、革新は遊びで起きるとは限らない。

【発表要旨②】

発達障害の strength と、その適応的意義：実証の可能性を交替劇に問う

正高 信男（京都大学 霊長類研究所）

発達障害をもつということは、社会性の欠落とおうおうにして考えられている。しかしそれは他人にたよることがなく、独力で道をきりひらき、独自のライフスタイルと生計の道をきりひらく vitality にあふれている者ではなかったのか。現状に満足することなく、たえず変化を求め、あたらしいことに好奇の眼をむける進取の精神の持ち主であったかもしれないという説は、従来の障害をその負の面ばかりに着目する発想にはない前向きさがあり、否定できない魅力が存在する。

それが現代人が隆盛をきわめるなかで、少数派と化して社会の片隅においやられてきてしまったのであるとするならば、その少数派の特性を実証的に研究することによって、私たちはまさに、障害の見方を根本的に変換することになるとおもわれ、その意義はけっして小さくないと想定されるのである。

発達障害の問題が社会の注目をあつめるようになって久しい。こうした障害は、脳のごくわずかな機能障害によってもたらされることが明かとなってきた。脳はさまざまな情報処理を行っている。その局所的な機能不全とネットワークに支障の生ずることが、生活のさまざまな困難にさまざまな形で反映されてくることが判明してきている。脳のどこにどのような問題が生じているかによって、その困難の質は大きく左右されることも解明されてきた。

また、その障害のほとんどは遺伝的なものであることも明らかとなってきた。文部科学省の2004年の調査結果によると、全国の小・中学校において、通常学級に在籍している子どもの6.3%（約67万9000人）が何らかの形でこのような障害を抱えているとされている。これは言うまでもなく、たいへんな数字である。どうしてこのようなことが、起こったのだろうか？

生物学の常識に従うならば、およそ障害という概念に従うかぎり、その発症率は2万人にひとりとか、1万6000人にひとりであるのが当然である。障害とは元来、生存する上で不利を被る以上、自然淘汰の対象によりなりやすいからにほかならない。つまり障害を持っているために、子孫を残す上で不利であるからである。ひるがえって発達障害で、発症率が「異様に」高いという事実は、この一連の障害を被っていても、今まではなんら淘汰の対象にとりたててなることはなかったことを示唆している。つまり生きていく上で、不利を被ることはなかったし、たいていは障害でも何でもなかったということになる。

軽度であれ何であれ、およそ障害と名づけられたものが本当は障害でなかったというのは、全くの矛盾である。そして私たちは、この事実に冷静に着目することから、（1）なぜ淘汰されない障害が存在し、かつ（2）なぜ今になってそれが障害として問題視されなく

ではならなくなったのかを、考えなくてはならないのである。そして、そこでひとつの解釈として人類学で仮説として提唱されてきたのが、「今日では障害として、短所としてかたづけられてしまっている特性も以前は、適応的な特性であった」とする考え方である。

端的に、「キレ」やすい子ども、学校で「落ち着きのない」子どもがその典型として、海外では論じられてきている。今日では、学校でクラスメイトとの協調性に欠け、授業についていけない「落ちこぼれ」であるかもしれないが、人類がかつて経験した狩猟生活では果たして、どうだったか？

他人にたよることがなく、独力で道をきりひらき、独自のライフスタイルと生計の道をきりひらく vitality にあふれている者ではなかったのか。現状に満足することなく、たえず変化を求め、あたらしいことに好奇の眼をむける進取の精神の持ち主であったかもしれないという説は、従来の障害をその負の面ばかりに着目する発想にはない前向きさがあり、否定できない魅力が存在する。

それが現代人が隆盛をきわめるなかで、少数派と化して社会の片隅においやられてきてしまったのであるとするならば、その少数派の特性を実証的に研究することによって、私たちはまさに、「交替劇」を心理的側面においてつまびらかにすることに成功することになるのではないかと考えられるのである。しかも、上述の仮説はあくまで仮説にとどまり、支持するデータを得ることなく今日にいたっているのである。本発表では、こうした発想のもと発達障害の子どもの中に、狩猟人としての特性を実験的に発見しようとする仮説を提示した。

【参考・研究会の様子（撮影：林 耕次）】



(大村氏による発表の様子)



(正高氏による発表の様子)



(質疑応答の様子)



(研究会には、A01 班の西秋先生なども参加された。)